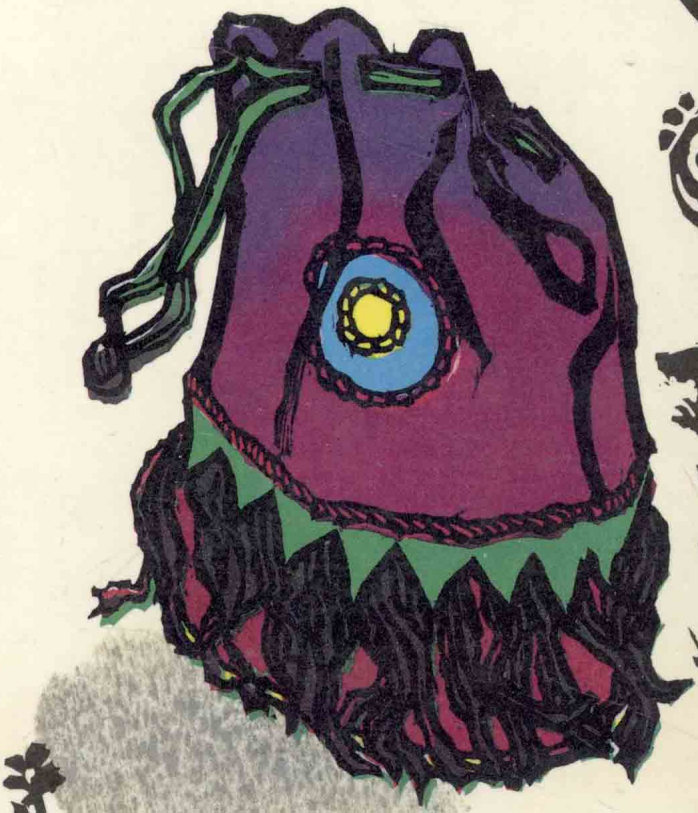
Life & Times of Michael K

マイケル・K

J. M. クッツェー

くぼたのぞみ 訳



マイケル・K

J.M.クッツェー
くぼたのぞみ 訳

筑摩書房

Titl : LIFE & TIMES OF MICHAEL K
Author : J. M. Coetzee
Copyright © 1983 by J. M. Coetzee
Japanes translation rights arranged
with Translation Enterprise Ltd., %
Peter Lampack Agency Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

マイケル・K

1989年10月25日　初版第1刷発行

著　者　J・M・クッツェー
訳　者　くぼたのぞみ
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前2－6－4
電話 東京(5687)2680(営業)
東京(5687)2670(編集)
Fax 東京(5687)2685～6(営業)
東京(5687)2678～9(編集)
振替東京 6-4123
郵便番号 111

ISBN 4-480-83100-2 C 0097　　厚徳社・和田製本

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが，小社読者係宛に
ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

マイケル・K

カバー・扉装画　降矢洋子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦争は万物の父、万物の王
ある者を神として、ある者を人として示し
ある者を奴隷にし、ある者を自由にする

❖ I ❖

マイケル・Kは兎唇だった。母親の身体からこの世に産まれ出るのを助けた産婆が、最初に気がついたのはそのことだった。唇はナメクジの足のようにめくれ上がり、左の鼻孔が裂けていた。産婆は、母親からその子をしばらく隠すようにして、小さな口のつぼみに指を差し込んでこじ開け、口蓋が無事なことを知ってほっとした。

そして、母親に「あんたはきっと幸せになるよ。一家に幸運をもたらすからね」と言った。でもアンナ・Kは最初から、閉じようとしない口と、自分に対して剝き出しにされる生々しいピンクの肉が好きになれなかった。この数カ月ずっと、自分の身体の中で育ってきたもののことを考えて彼女は身震いした。子どもは乳首を吸うことができないので、ひもじさのために泣きわめいた。ミルク瓶を試してみたが、それも吸えないとわかったので、ティースプーンで飲ませてみた。子どもが咳き込んだり、びちゃびちゃやったり泣いたりすると、耐えられないほどいらいらした。

「大きくなったら、閉じるようになるさ」と産婆は請け合った。それでも、唇は閉じなかった。ちゃんとは閉じなかったし、鼻もまっすぐにはならなかった。

母親は子どもを仕事に連れていった。もう赤ん坊とはいえない年齢になっても、ずっと連れていった。人のうす笑いやひそひそ声がいやなので、よその子どもから遠ざけておいた。くる年もくる年もマイケル・Kは毛布の上に座って、母親が他人の家の床を磨くのを眺めながら、静かにしていることを覚えた。

マイケルは、ほんのしばらく試しに通った学校から、身体の障害と精神的な遅れという理由で追い出され、フォーレのハイス・ノレニウス養護院に入り、そこで、さまざまな苦しみを背負った不幸な子どもたちといっしょに、国の費用で、基礎的な、読み書き、算数、掃除、床磨き、ベッド・メイキング、皿洗い、籠編み、木工、そして穴掘りなどを習った。十五歳でハイス・ノレニウスを卒業して、ケープタウン市の市営公園管理局に、三等級bの庭師として就職した。三年後、公園管理局をやめてしばらく失業した。その間、彼はベッドに横になってじっと手を見て過ごした。それから、グリーンマーケット・スクェアの公衆便所の夜間世話係の仕事にありついた。ある金曜日の深夜、仕事からの帰宅途中、地下鉄で二人の男に襲われた。男たちは、彼を殴り、時計と金と靴を奪って、腕をざっくり切り、親指を脱臼させ、肋骨を二本へし折り、気を失った彼を置き去りにした。この事故にあってから、彼は夜の仕事をやめた。そして公園管理局にもどった。そこの仕事でゆっくりと昇級して一等級の庭師になった。

顔つきのためだろう、Kには女友達がなかった。独りでいるときが一番くつろげた。どちらの仕事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もそれなりの孤独を与えてくれたが、便所の奥にいると、白いタイルに反射して影のない空間を造る、明るすぎるほどのネオンの光で圧し潰されるような気分になった。お気にいりの公園には、高い松の木と仄暗いアガパンサスの並木道があった。土曜日はときどき正午の時報を聞き逃して、午後いっぱい独りで働き続けることがあった。日曜の朝は遅くまで寝ていて、午後は母親を訪ねた。

人生の三十一年目、六月のある朝遅く、デ・ヴァール公園の落葉を熊手で集めていたとき、マイケル・Kのところに伝言が届いた。その伝言は人に託されて、母親から来たもので、病院から出てゆけと言われているのでこっちへ来て自分を養って欲しいという。Kは道具を片づけてバスでサマセット病院へ向かった。入口を出たところの陽だまりの、ベンチに腰かけている母親を見つけた。外出用の靴がそばに立ててあるほかは、衣類を全部着込んでいた。彼女は息子を見て、他の患者や見舞人にわからないように、片手を目にあてながら泣き出した。

何カ月もアンナ・Kは手足のひどいむくみに悩まされていた。その上、腹部も腫れ始めた。歩くことも息も満足にできない状態で入院した。刺され、殴られ、銃で撃たれた傷で苦しむ患者たちに混じって、廊下に横になったまま五日間を過ごした。患者のたてる音で眠れなかったが、看護婦からも無視されたままだった。若い男たちが派手に死にかけているときに、この老婦人を元気づけるために時間をさく余裕などなかったのだ。到着したとき酸素吸入で意識を取りもどし、注射を打たれ、腫れを鎮める錠剤を与えられた。おまるがほしいと頼んだけれど、だれも持ってきてくれなかった。部屋衣もなかった。一度、壁を伝いながら便所まで行こうとしたとき、グレーのパジャマを着た老人に呼びとめられた。彼は猥褻なことを口にし、いちもつを見せつけた。生理的な要求は、がまんできないほ

どの苦痛になっていた。看護婦から錠剤のことを訊ねられると、飲んだと答えたが嘘をつくこともあった。その後、息苦しさは治まったものの、あまり脚がかゆいので、掻きたくなるのを抑えるために両手を下に敷いて寝なければならなかった。三日目には、家に帰りたいと懇願したが、どうやら訴えるべき相手を間違えたようだった。だから、六日目に彼女が流した涙は、この煉獄から逃げ出せるという嬉し涙だった。

受付で、マイケル・Kは車椅子を使いたいと申し出たが断られた。ハンドバッグと靴を持って、バス停までの長い道のりを、母親を支えて歩いて行った。長い列ができていた。柱に貼り付けられた時刻表では、バスは十五分おきに来ることになっていた。たっぷり一時間は待たされているうちに、影は長くなり、風が冷たくなった。アンナ・Kは立っていられなくなって壁に寄りかかり、乞食女のように脚を投げ出して座りこんだ。バスがやってきたが、空席はなかった。マイケルは手すりにつかまり、母親がよろめかないよう抱いていた。シー・ポイントの彼女の部屋に着いたときは、五時をとうに過ぎていた。

八年間、アンナ・Kは、シー・ポイントにある大西洋を見渡す五部屋のフラットに住む、退職したメリヤス肌着製造業者とその妻に、家政婦として雇われていた。契約書の項目によれば、午前九時に出勤して、午後三時間の休みを取ったあと、夜の八時まで働くことになっていた。週に五日、あるいは週に六日、交互に働いた。二週間ごとに賃金と休みをもらい、一角に自分の部屋をもらっていた。賃金はまあまあで、雇い主はもののわかった人たちだったが、仕事がきつかったのでアンナ・Kは不満だった。ところが一年前、身体を屈めると眩暈と胸苦しさを覚えるようになった。そして浮腫が出

始めた。ブールマン家の人たちは、賃金を三分の一だけ減らして彼女に料理をまかせ、家事にはもっと若い女を雇った。自分の部屋に住み続けることを許され、彼女の処遇はブールマン家が握ることになった。浮腫がひどくなった。入院する前、何週間も寝たきりで働くことができなかった。彼女はブールマン家のお情けが終わりになるのを、いつも恐れて生きていた。

コート・ダジュールの階段の下にある彼女の部屋は、エア・コンディショナーが取り付けられるはずのところだったが、それが設置されることはなかった。ドアの上には、赤い髑髏のマーク、その下に「危険」という表示が英語、アフリカーンス語、ズールー語で書かれていた。電灯も換気装置もなかった。空気はいつも黴の生えたような臭いがした。マイケルは母親のためにドアを開け、蠟燭をともし、彼女が寝支度をするあいだ外に出ていた。彼は母親が帰ってきた最初の夜をこんなふうに過ごし、次の週も毎夜、いっしょに過ごした。彼女のためにパラフィン・ストーヴの上でスープを温め、できるかぎり居心地よくしてやろうと、雑用をこなし、彼女が発作的に泣き出したときは、腕をさすって鎮めてやった。ある晩、シー・ポイントからのバスが一台も来なかったので、彼女の部屋でマットの上に自分のコートをかけて寝なければならなくなった。真夜中、骨の髄までしみる寒さで目が覚めた。眠れないし、夜間外出禁止令で外へ出ることもできずに、夜明けまで震えながら椅子に座っていた。母親はずっと呻き苦しみ、いびきをかいた。

マイケル・Kは、長い夜に閉じ込められた狭い部屋のなかで、二人の身体がどうしても近づいてしまうのがいやだった。ベッドから母親を助け起こさなければならないとき、腫れあがった脚が目に入ると、当惑して目をそむけた。腿と腕は引っ掻き傷だらけだった。(しばらくは、夜中に手袋をはめ

ていたくらいだ)。しかし彼は義務として、目にするどんなものからも逃げたりはしなかった。ハイス・ノレニウスの自転車置場のうしろで、何年も前に悩まされた問い、つまりなぜ彼がこの世に生まれてきたかという問いには答えが出ていた。母親の面倒を見るためにこの世に生まれてきたのだ。

息子が何を言ってきかせようと、部屋を失ったらどうなるのかというアンナ・Kの恐怖は鎮まらなかった。サマセット病院の廊下で瀕死の病人に混じって過ごした夜からというもの、戦時に見苦しい病気をもった老女に対して世間がどれだけ冷たいものか、家に帰っても忘れられなかった。働くこともできず、ブールマン家の人のあてにならない善意と、愚鈍な息子の従順さによって、自分がかろうじてどん底まで落ちずに済んでいるのだということがわかった。最後の頼みの綱は、ベッドの下のスーツケースのなかのハンドバッグに入れてある蓄えだった。新しい通貨を一つの財布に、あまりにも疑い深くて交換しなかったため値打ちがなくなってしまった古い通貨を、もう一つの財布に入れていた。

こうしてある晩、マイケルがやってきて公園管理局の一時解雇(レイオフ)について話しているとき、彼女の心のなかでそれまではぼんやりと夢に見ていただけのことだったのだが、あることが首をもたげ始めた。いいことなどほとんどなさそうなこの街を出て、少女時代を過ごした静かな田舎へもどる計画である。

アンナ・Kはプリンス・アルバートの近くの農場で生まれた。父親は頼りにならなかったし、酒を飲んでは厄介を起こした。子どものころ、一家は農場を次々と渡り歩いた。母親は洗濯を請け負い、何軒もの台所で働いた。アンナも手伝った。それから、一家はオウツホールンの町へ引っ越して、アンナはしばらく学校に通った。彼女に最初の子どもが生まれてから、ケープタウンに来た。そこで違

う父親の子どもを生み、三人目の子どもが死んで、その次にマイケルが生まれた。オウツホールンに行く前の数年が、暖かく豊かな、人生のうちでもっとも幸福な時期としてアンナの記憶に残っていた。ニワトリがクックッと鳴いて地面をひっかいているあいだ、養鶏場の埃の中に座っていたのを憶えていた。繁みのなかで卵を探したことも。冬の午後、風通しの悪い部屋のベッドに横になって、外の階段に雨がしたたり落ちるのを聞きながら、彼女は、人を人とも思わない暴力、すし詰めのバス、食糧を求める列、横柄な店主、泥棒と乞食、夜中のサイレン、夜間外出禁止令、寒さと湿気などから逃げ出すことをぼんやりと考えた。そして、死ぬのなら、せめて青空の下で死ねる田舎へもどりたいと思った。

彼女がマイケルに語った計画では、死ぬことは口にしなかった。一時解雇（レイオフ）される前に公園管理局を辞めて、プリンス・アルバートまで汽車で連れていってくれるように頼んだ。そこで彼が農場で仕事を探しているあいだに、彼女は部屋を借りることにしようと。もしも、彼の住居がうんと広かったらいっしょに住んで彼女が家の世話をするし、そんなに広くなかったら週末に彼女を訪ねてくればいいと。本気だということを見せるために、彼にスーツケースをベッドの下から取り出させ、目の前で財布いっぱいの新札を数えて見せた。この目的のために取り分けておいたのだ、と彼女は言った。

小さな田舎町がどうして二人のよそ者を受け入れてくれると思えるのか、マイケルが訊いてくれればいいと彼女は思った。そのうちの一人は健康を害した老女だというのに。彼女は答えを用意していた。しかし、マイケルは一瞬たりとも母親を疑ったりしなかった。ハイス・ノレニウスで過ごした歳月、母親が彼をそこに置いていったのは理由があると、最初はよくわからなかったけれど最後にはは

っきりすると、ずっと信じていたので、いまでは彼女の計画が二人にとって賢明なことだと、疑いもせずに受け入れていた。彼が見ていたのはキルトの上に広げられた紙幣ではなかった。彼の心の目に映っていたのは、広大な草原(フェルト)のなかに立つ煙突から煙が立ち昇る、水漆喰を塗ったコティージだった。そして正面のドアで母親が微笑みながら、長い一日を終えて帰る彼を、元気に出迎えようとしていた。

次の朝、マイケルは仕事に行かなかった。母親の金を二つの束に分けてソックスに詰め、鉄道の駅の幹線の予約窓口へ向かった。係員は、プリンス・アルバートまでも、その線の最寄りの駅までも(「プリンス・アルバート? それともプリンス・アルフレッド?」と訊いた)、切符は二枚売るには売るが、Kが汽車に乗るには座席の予約と、警察が指定したケープ半島地域を離れる許可証が必要だと言った。予約は、一番早くて二カ月先の八月十八日になるということだった。許可証のほうは、警察からもらうしかなかった。Kはなんとかもっと早く出発したいと頼んだが、だめだった。母親の健康状態は特別な理由にはならなかった。むしろ反対に、母親の健康状態など口にしないほうがいいと、係員に忠告された。

Kは駅からケールドン・スクェアへ行き、ぐずぐず泣いている赤ん坊連れの女のうしろで二時間も列に並んだ。そこで、二組の書式を与えられた。一組は母親のため、もう一組は彼自身のためだった。「汽車の座席予約を青い用紙にピンでとめて、E5の部屋に持っていってください」と係りの女性警官は言った。

雨が降ると、アンナ・Kは古いタオルをドアの下に詰め込んで、水がしみ込まないようにした。部屋はデトルとタルカム・パウダーの臭いがした。「ここに住んでると、石の下のヒキガエルみたいな

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com